

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04213

研究課題名(和文) 課題非従事行動への対処法に関する学部教育と初任・若手期OJTとの連携に関する研究

研究課題名(英文) A Research on Teacher Training Programme for Undergraduate Students and Novice Teachers to Prevent Off-task Behavior by Students

研究代表者

山田 雅彦 (YAMADA, Masahiko)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：30254444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：都内公立小中学校への質問紙調査により、課題非従事行動への対処法を学ぶ主な機会が現職教育に委ねられており、教員養成課程で対処法をある程度学ばないと、課題非従事行動に対して無防備なまま初任期を過ごすことになる可能性を確認した。また、課題非従事行動への適切な対処に重要となる精緻な児童観察が、経験のみによっては向上しない可能性を確認した。

これらをふまえて、初任期の独習を前提とした、教員養成課程で学ぶ課題非従事行動への対処法として、イラストや風景に対して即興的に口頭でコメントを加える活動を考案し、その効果を確認した。児童観察の精緻化に有効である可能性を確認した。

研究成果の概要(英文)：Through analysis of the questionnaire responses administered to elementary and junior high school faculty in Tokyo, I suggest that novice teachers are helpless to prevent off-task behavior and must try to avoid off-task behavior by relying on their classroom management skills and lessons until they acquire specific skills for controlling off-task behavior. The present findings suggest that it is necessary to create a curriculum for undergraduate students to learn skills they can use as novice teachers. Then I propose a self-study program for novice teachers to improve their observation of unexpected behaviors by students. The program consists of activities that include giving comments in response to 10 flashcard illustrations that have no relation to schools or children.

研究分野：教育学

キーワード：課題非従事行動 教師教育

1. 研究開始当初の背景

「学級崩壊」が社会問題化して二十年近く経過し、課題非従事行動への対処法は教育実践上重要な課題となっている。課題非従事行動の低減が目指される一方で、実際に発生してしまった課題非従事行動をいかにして制止するか、という研究はほとんど行われていない。そのため、課題非従事行動を制止する際には「毅然とした対応（注意、叱責）」が素朴に推奨されている現状である。「毅然とした対応」は、児童・生徒の教師に対する感情的な反発を招く恐れがあり、別の対処法と併用しないとより深刻なトラブルに発展するリスクをはらんでいる。「熱心に」「毅然と」以外の方法で課題非従事行動を制止する方法の開発と、その方法によって初任・若手教師の課題非従事行動への対処力を向上させる教師教育カリキュラムの編成が喫緊の課題となっている。

研究代表者は過去の授業分析により、教師が私語や不規則発言を即座に制止せずしばらく続けさせたり、時には積極的に雑談に応じたりすることで、声を荒げることも当該児童を激昂させることもなくその私語や不規則発言を収束させるケースを指摘した。そしてこれを、教師と児童の関心の対象（フォーカス）が一致しなくなった状況を克服するための、教師のフォーカスを共有するよう児童に求めることと並ぶ第二の方法として位置づけ、「子どものフォーカスに応じる」と命名した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、課題非従事行動を制止する方法を習得するための教師教育プログラムについて、特にその方法を初任・若手教員に効果的に定着させるための効果的な支援のあり方を明らかにすることである。

「フォーカスに応じる」は典型的な臨機的対応であり、事前に準備することが難しい上にその習慣を形成するのに数ヶ月以上の時間を要すると考えられる。そのため、教員養成課程のカリキュラムだけで習得を期待するのは非現実的であり、初任・若手期の同僚の支援や自学自習を前提とした、「フォーカスに応じる」習得のための教員養成課程での教師教育のあり方について検討することとした。

3. 研究の方法

課題非従事行動への対処法習得過程をめぐる初任・若手期の位置づけと、教員養成課程と現職教育との分担・連携のあり方を把握するための基礎資料として、都内公立小中学校 1800 余校への質問紙調査を行い、課題非従事行動への対処法に関する初任・若手期の位置づけを把握した。

並行して、初任・若手期に独習することを前提に、教員養成課程で習得可能な活動として、イラストや風景について第一印象でない

コメントをすることを考案し、その効果について学部学生ならびに現職教員を協力者として検証した。

4. 研究成果

質問紙調査により、都内公立小中学校から寄せられた回答（回収率 21.7%）のうち、欠損のない 322 件（小学校 207 件、中学校 115 件）を分析し、以下の結論を得た。回答者の理解によると、課題非従事行動の頻発は学校や教師よりもむしろ教師を取り巻く状況（児童・生徒や家庭、社会の変化）に起因している。この理解に従えば、課題非従事行動の頻発は教師の力量が落ちていることによるわけではなく、たとえ教師が課題非従事行動を未然に防ぐ力量を以前と同様に身につけているとしても、課題非従事行動は以前よりも頻発し、教師がこれに対処する機会は以前よりも増えていることになる。回答者の理解によると、課題非従事行動を制止するスキルを習得する機会としては、大学での教員養成課程よりも現職教育のほうが重要であるとされる。さらに回答者の理解によると、課題非従事行動への対処として最も有効なのは、学級経営と授業の改善であるとされる。およびの結果は、初任・若手期の教師は課題非従事行動を制止するスキルを持たないまま、それを習得するまでの間はみずからの学級経営と授業によって課題非従事行動を回避する必要があることを示唆している。一連の結果から、初任・若手期に活用できるスキルを習得する機会を大学の教員養成課程において用意する必要があることが示唆された。

独習活動については、「フォーカスに応じる」際の教師には「とっさに思い浮かぶ常識的・一般的な応答を自制し、それ以外の応答を試みる」という思考過程が求められていることを指摘し、「目についたものについて第一印象でないことを言う」活動がこれと同じ原理によることを指摘した。そして、多忙な初任・若手教師が通勤途中に反復練習することを想定して、この活動を習慣化するために 4 段階のスマールステップを設けて大学の授業として学生の参加を求めた。大学生 10 名に、フラッシュ型教材を使用したシミュレーションの後で通学時に 2 週間の独習を課した結果、第一印象でないことを思い出す早さと頻度が向上したとの報告があった。また、周囲に対する観察がより精緻になったとの報告もあり、児童・生徒を対象とする観察（みとり）が精緻になる副次的効果も示唆された。

「フォーカスに応じる（第一印象でないことを言う）」ためには、表現の豊富さとともに状況を理解する観点の豊富さ（観察力の高さ）も必要であること、短期的に効果が上がるのは後者である可能性が高いことをふまえて、より厳密な手続きにより活動の効果測定を試みた。教員養成課程学部 2 年次生 9 名を協力者として、学校教育とは無関係なイラ

スト 10 枚を使用したフラッシュ型教材にコメントする活動を週 1 回 5 週間反復した後、学校での生徒指導上のトラブルを描いたイラストへのコメントを課し、活動未経験の学生 10 名および現職教員 16 名とコメントの内容を比較した。コメントを、イラストの細部への着目および当該トラブルへの教師の対処法をはじめとする 5 カテゴリーに分類して分散分析したところ、イラストの細部に着目したコメントが増加する効果が認められた。関連して、熟練教師による授業観察の特徴とされる、目視できる細部を根拠として見えない背景を推し量る推論が現職教師に匹敵するほど増加した。ただし、トラブルへの対処法（教師としての指導言）を多様化させる効果は確認できなかった。

また、初任・若手期（初任校）でのどのような経験が教師の観察力に影響しているのかを把握するために、現職教師 50 名（小学校 47 名、中学校 3 名）の協力を得て、生徒指導上のトラブルを描いたイラストおよび教室風景の写真へのコメントと初任校・現任校での経験の関係を確認した。因子分析により、課題非従事行動の克服のために児童・生徒や同僚と積極的にかかわろうとするか（積極性）、同僚や児童・生徒だけでなく学生時代の経験も含めて良好な人間関係に恵まれている（人間関係）、課題非従事行動を頻繁にとる児童・生徒と数多く、または継続的にかかわってきたか（実体験）、記録をとったり情報を収集したりして独力で力量向上を目指すか（独学）の 4 因子が抽出された。回答を、子どもの考えや感情（子ども）、教師が行い指導（教師）、全般的・直観的な印象（印象）、描かれていないことの想像や連想（連想）、画面細部に描き込まれていること（細部）の 5 カテゴリーに分類し、これに加えて他の 4 カテゴリーの回答が「細部」を根拠としている場合「細部からの推論（推論）」として、教師の経験の各因子との関係を確認した。重回帰分析の結果、初任期の「実体験」「独学」が、2 校目以降に勤務する協力者の「細部」と「推論」の回答に負の影響を及ぼしている可能性が示された。勤務年数から各カテゴリーの回答への影響が確認できなかったこととあわせて、教師の観察力が経験を重ねることだけによって向上すると期待することは難しく、観察力向上を図る具体的な教師教育が必要であることが示唆された。なお、専科・特別支援・継続的な育児経験の三者が、「子ども」カテゴリーの回答数に正の影響を及ぼしている可能性が示された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

山田雅彦 課題非従事行動への対処法を

習得する過程に関する東京都内公立小中学校への質問紙調査 初任・若手期の位置づけを中心に 東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野・生涯教育学分野 『教育学研究年報』 査読なし,37,2018,印刷中.

山田雅彦 児童・生徒の想定外の行動に対処するために「第 1 印象ではないことを言う」ための独習プログラム 『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I 教育学講座, 教育心理学講座』 査読なし, 第 68 集,2017,61-70.

〔学会発表〕（計 4 件）

山田雅彦 教師の経験が「みとり」に及ぼす影響に関する調査 『日本教育方法学会 第 53 回大会発表要旨』 2017,52.

山田雅彦 反省的思考の育成を目指した教師教育カリキュラムを補完する独習法の可能性 『日本カリキュラム学会第 28 回大会発表要旨集録』 2017,73-74.

山田雅彦 課題非従事行動への対処法に関する公立学校への質問紙調査 『日本教師教育学会第 26 回研究大会要旨集』 2016,148-149.

山田雅彦 児童・生徒の想定外の応答に対処するための独習プログラムに関する実践報告 課題非従事行動への対処法に関する学部教育と初任・若手期 OJT との連携に関する研究 『日本教師教育学会 第 25 回研究大会発表要旨集』 2015,54-55.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~yamadama/papers/kaken15k04213/kaken15k04213.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田雅彦 (YAMADA, Masahiko)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：3 0 2 5 4 4 4 4

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()